

知らなければ始まらない

富山高等専門学校 三年 吉本映里奈

世界と日本の幸せのためには、私はまず、世界を知らなければならぬのだと思う。

「でもメイドさんに対する扱いとかどうなのかな。」

派遣先のマレーシアからの帰国後、同じマレーシアに派遣された一人の仲間のご感想だ。私はこの感想に違和感を覚え、今でもよく考える。その時決まって思い出すのは一人の女性だ。

私は昨年十二月から約一カ月間、国際交流の一環として行われたプログラム

に参加した。彼女はそのホームステイ先のメイドだった。家にメイドがいる光景が珍しく、私は絶えず彼女のが気になった。小柄な彼女は私とそれほど年が離れていないように見えた。その小さな体で家事をこなし、台所の片隅で一人食事を摂り、一家が団欒して見るテレビを階段に座って後ろからそっと見ていた。私はそんな彼女が痛々しく、家庭内の格差に疑問を持った。これはこの国の急激な経済成長の歪みであり、彼女はその被害者ではないか。そして先の仲間と同じように「メイドさんに対する扱いとかどうなのかな」と思った。

私は彼女と話したかったが、彼女は挨拶も通じないほど英語が話せなかった。そんなある日、ホストマザーが彼女の話を話してくれた。にわかには信じられないことばかりだった。彼女はカンボジアからの出稼ぎ労働者で故郷に子供を二人残してきていた。それをホストマザーは「仕方ない」と言った。「仕方ない」その言葉だけでも彼女のような人はこの国では珍しくないことがうかがえた。

母と子が離れ離れになることに仕方がないことなんてない。私はその日のうちにカンボジアについて調べた。愕然とした。経済・教育・人権どれをとっても日本で暮らしてきた私には言葉の意味は理解できても全く実感できない内容だった。そこでようやく私は、彼女が黙々と仕事をすることやホストマザーの「仕方

ない」の意味を知った。

日本で暮らしていれば、清潔な水が蛇口から出てくることも学校に行くことも液晶テレビを見ることも当り前だ。月給が二万円だったり、住む土地を奪われない、独裁政権下、理不尽に虐殺されたりなどは遠い海の向こうの実感の伴わないぼんやりとした出来事ではなかった。その遠い海の向こうの人が幸せになりたいたいと耐え忍んだ結果手に入れた、ずっとましな異国での生活も酷いものに見える。彼らの雇用の受け皿を担い、先進国に追いつこうと必死に努力している新興国も、彼らを安い賃金でこき使う悪者に見える。一面ではそうかもしれない。しかし、だからこそ今、遠い海の向こうの人々は犠牲を払ってでも幸せになろうとしているのだ。家族と離れても言葉が通じなくても仕事が辛くても、その現状を受け入れ、毎日懸命に頑張っている。そんな様々な国の個々の歴史と現状を「どうなのかな」と一言で言ってしまう資格が私にはない。

間違っていると怒るのも可哀そうだと同情するのも大切なことだ。しかし、それは、日本人という視点から見た思いにすぎない。背景にある事情を知りもせず口を出すのは無責任ではないか。私たちはあまりに恵まれ過ぎて、自分たちはいつも与える側なのだと無意識に思っている。そうやって安全な殻の中から一時

的な感情で相手の「仕方ない」事情を知らないままに干渉することが正しいと思えない。世界が今どんなうねりを渡っているのか、個々の国がどんな歴史を背負い、どこに向かおうとしているのかを知らなければ、根本的な問題の解決には至らないし、覚えす誰かの尊厳を踏みにじりかねない。

私は日本も共に幸せになるために、どんなに残酷でも現実を直視して世界を知りたい。心が折れそうになることもあるだろう。その時は思い出そうと思う。幸せのためにひたむきに生きていた彼女のことを。